

# もの作りの 大切さを もう一度 考えたい

モノが溢れる時代が過ぎてから「もの作りの大切さ」については、各方面から課題として常に挙げられてきたこと。長い間、価格競争が続き、利益追求に走らざるを得ない状況の中、「もの作りの大切さ」が、おさなりのようになっていた部分はないだろうか。また、市場規模が減り続ける中では、一致団結して取り組むことは簡単ではなかった。そして段々と個々による対応に頼るほかなくなり、「共同作業を忘れていった。そこに足りなかったのは、仲間と切磋琢磨するためのコミュニケーション力。お互いに協力するという考え方はないだろうか。専門業であるからこそ、身近なところに優れた技術や考えをもった仲間がいる。時代に合った新しいことへの挑戦を仲間と共に行ってきただろうか。誰もが目の前のことばかりを追求していくうちに、本来すべき活動がおろそかになっっているような気がする。産業として力をつけるためには、団体や企業が個別に動くよりも、まとまった力で前進するほうが健全に発展できるはずである。

技術や感性を引き継ぎ、  
発展させていくコミュニティー  
ジュエリー・アーティスト・ジャパン



シンコーストスタジオ(世田谷区船橋)の米井亜紀子代表は、「いい仕事、いいものづくり」をしたくて「ジュエリー・アーティスト・ジャパン」(JAJ)を、2012年より立ち上げている。

日本の伝統的な仕事や感性を引き継ぎながら、アーティストックな時代を先駆けるデザインのものづくりができる人材の育成、交流を目的としている。

基本的に、若手ジュエリーアーティスト、クラフトマン、デザイナー、その他ジュエリーづくりに関わる人たちのためのコミュニティーとして、日本に限らず海外を拠点とするジュエリーアーティストを招き、作品を囲みながら、対談形式で話を進める。質疑応答では、必ず多くの質問が出るのも若手が集まる会を象徴しているが、その熱意は、年齢層が高い業界が失っているひとつではないだろうか。



昨年11月に開かれたセミナーでは、現代の名工に選ばれた、新潟の洗谷金也氏が登壇し、若者へのアドバイスとして「一度は必ずスポットライトが当たる日が来る。その時のために準備が必要である。作品を作っていないければ、取材の対象とならないし、受賞歴が無ければチャンスは逃すこととなる」などを挙げエールを送っている。

また、職人技を継承している凄さについての質問に対しては「良い仕事だと伝えてきた。価値あるものだと伝えてきている。存在価値や社会に対する必要性なども伝えた」とした上で、お客様が来る前に、自分からも一歩近づきべきことを勧めた。

しかし、客も選んでいるという。長い経験の中には、「俺たちが売ってやっているとする人」や、「無理強いする人」、「問屋が教えてくれるから、生意気だ!」などという人もいたというが、このような客を自分



の息子に残したいかを考えたという。また、苦勞して覚えたことは忘れないと自負していることもあり、情報を欲しがっている地域の同業者にも自分が学んだことを教えてきたという。

それは「ギブ&テイク」の考えであり、「腕のいい人ほど、頭を下げても光るものだ、自然と応援者も出て来てくれる」との実体験である。

また、「人と同じことをしていたら技術は伸びないが、人の1.5倍経験を積み、必ず願いは叶い、ほとんどを実現できる。大きい小さいでもなく、小さくても縮小して考えれば、一人でもできるものだ」と昔に教わったことを今でも忘れないということだ。

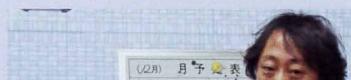
このような考え方や思いは、日頃のルーティンワークでは、教えてもらえないことである。そのようなことも「背中を見て学べ」的な時代もあったが、このような機会を業界として与えていないのも事実。もっと垣根を越えたプラットフォームがあってもいいんじゃないだろうか。



JAJの活動に対して、ジュエリー製造団体等協議会の川崎猛会長は、「現在、宝飾市場において6割ほどが海外ブランドではないだろうか。つくりの立場からするとその割合はもっと多く感じている。そのような状況で、職人に対する適正な工賃が出ず、職人が弟子を育てることが出来ていない。技のある会社も半分に減少し、日本の技術が生かされていない」との現状感を話した上で、「本来、米井さんが行う活動は、我々の製造団体や業界の団体が行うことだと思う」としていた。

人同士でも話が弾んでいるのが特徴的である。

「生きた技術・生きた知識」で  
職人同士が情報交換する場



人同士でも話が弾んでいるのが特徴的である。



## TOPICS

トピックス

# ジュエリークリエイターの 次世代を担うJAJが活動内容を発表！

「ジュエリー・アーティスト・ジャパン」

11月30日、「東洋文庫ミュージアム」講演室で「ジュエリー・アーティスト・ジャパン」(JAJ)の活動内容と、今後の展開についての記者発表と作品展示が行われた。



バーレーン大使館 村越一夫氏

JAJは日本の伝統的な仕事や感性を引き継ぎながら、アーティストックな時代を先駆けるデザインの物作りができる人材の育成、交流を目的に、2012年「シンコーストゥディオ」代表の米井亜紀子氏が設立。若手ジュエリーアーティスト、クラフトマン、デザイナー、その他ジュエリー作りに関わる人たちのためのコミュニティである。引き継がれてきたものを次世代へつなぎ、新しく創造的、革新的なものを生み出していく礎になることを願って活動を続けている。

今回の記者発表会では、JAJに関わる人たちの熱い、もの作りへの想いを伝え、今後の展開について話がもたれた。

「ジュエリー製造団体等協議会」会長の川崎 猛氏は最後に挙手して発言。「本来は、ジュエリー団体が何かしらしなければいけないのに、米井氏が一人で動きだし、それに少しでも協力したいと思い今日ここにきました」

米井氏は「私はJAJの活動を通してもの作りに携わる人たちの熱意、そして確実に新しい風を感じ

ています。買う人、作る人、販売する人、そのどれもがWIN-WINの関係になる仕組みを考えていきます」と語る。

同プロジェクトの今後の活動にさらに期待が寄せられている。

<http://www.jewelryaj.org/aboutjaj>



日本ジュエリーデザイナー協会副会長  
関根正文氏



NPO 法人シャイン・オン!キッズ  
Cassie Easter氏



ジュエリー製造団体等協議会会長  
川崎 猛氏



JAJ代表 米井 亜紀子氏